

目的 近年、市販飲料の種類が増加し、若年層における過剰な摂取は肥満を誘発するなど健康面及び各国の食文化の形成にも影響している。そこで、コーヒー、紅茶、牛乳など各種飲料の飲用状況とイメージを、日本と韓国の大学生男女を対象にアンケート調査を実施し、民族間及び男女間の相違を調べた。

方法 試料とした飲料は、コーヒー、紅茶、緑茶、ウーロン茶、ミネラルウォーター類、牛乳、オレンジジュース類、コーラ類、スポーツドリンク類、栄養ドリンク類、ヨーグルト類の11種とし、伝統的な飲料として日本では抹茶を、韓国では人蔘茶を加え、なじみの少ないウーロン茶を除いた。嗜好性は、飲用状況とコーヒーと紅茶に用いる砂糖量で調べた。イメージは、「古めかしい」に対し「近代的」、「健康」に対し「不健康」とする12種の語句を用いる±7段階のS.D法で調べた。調査は1994年7月、香川県で男女199名、尚州市で男女200名、計男女399名を対象に実施した。

結果 飲用状況は、毎日、週2・3回、週1回、年1回、飲まないの5項目で調べたが、毎日飲んでいる飲料は、日本では男子の約30%がコーヒーとウーロン茶をあげ、女子の50%がウーロン茶をあげた。これに対し韓国では品種が多く、男女ともコーヒー、ミネラルウォーター類を60～72%の者が、次に牛乳、コーラ類を30～50%の者があげた。コーヒー、紅茶に用いる砂糖量は、スプーン2杯以上という甘味を好む回答は少なく、逆に紅茶には砂糖を用いない者が両国とも約30%いる。コーヒーの近代的イメージは韓国で強く、牛乳の健康的イメージは両国とも女子の方が強いことなど民族及び男女差がみられた。